Zeta function escimat with beta function of remake formula

Masaaki Yamaguchi

ベータ関数は、

$$\beta(p,q)=\frac{\Gamma(p)\Gamma(q)}{\Gamma(p+q)}$$

このゼータ関数版が、

$$\frac{\zeta(p)\cdot\zeta(q)}{\zeta(p+q)}=\bigoplus(i\hbar^{\nabla})^{\oplus L}=e^{-x\log x}$$

$y=x\log x$ がゼータ関数で、$z=e^{x\log x}$ もゼータ関数で、$e^{-f}dV=\frac{1}{\log x}$ が素数になっていて、$\zeta(s)=\frac{\beta(p,q)}{\log x}$ もゼータ関数で、素数 $=\frac{\text{偶数}}{\text{偶数}}$ が $\sqrt{2}$ と同じ仕組みになっていて、$y=x^{\log x}$ と $z=e^{x\log x}$ はともにゼータ関数であり、$e^{-f}dV=\frac{1}{\log x}$ は素数分布に関係している。$\zeta(s)=\frac{\beta(p,q)}{\log x}$ はゼータ関数の形をしている。素数 $=\frac{\text{偶数}}{\text{偶数}}$ は、$\sqrt{2}$ と同様の構造をしている。$\int e^{-f}dV=\int\Gamma^{'}(\gamma)dx_m=\frac{\Gamma}{\log x}$ と、サーストン・ペレルマン多様体である、整数を $\log x$ の奇数で割った結果の偶数が整数の補空間がゼータ関数の奇数性により、

$$\int e^{-f}dV=\int\Gamma^{'}(\gamma)dx_m=\frac{\Gamma}{\log x}$$

これから、

$$||ds^2||=8\pi G\left(\frac{p}{c^3}+\frac{V}{S}\right)$$

この 3 次元多様体のエントロピー値が、

$$\nabla^2\Psi=4\pi G(\rho+\frac{p}{c^2})$$

$$\nabla^2\Psi=4\pi G(\rho+\frac{p}{c^2})+K\frac{\zeta(2n+1)}{\log x}$$

$$8\pi G(\rho+\frac{p}{c^2})+K\frac{\zeta(2n+1)}{\log x}=\frac{R^2}{z^2}$$

$$||ds^2||=e^{R+\frac{1}{2}g_{ij}\Lambda\log(R+\frac{1}{2}g_{ij}\Lambda)}+\frac{K\zeta(2n+1)}{\log x}$$

と言えて、

$$||ds^2||=e^{-2\pi T||\psi||}[\eta+\bar{h}]dx^{\mu}dx^{\nu}+T^2d^2\psi$$

と、AdS5 多様体となる。

指数関数における、相加相乗平均方程式が、

$$\log Z=\log\frac{p^q\cdot q^p}{(p+q)^{(p+q)}}$$

$$p+q=\sqrt[p+q]{p^q\cdot q^p}$$

$$= \sqrt[q]{p} \cdot \sqrt[p]{q}$$

ゼータ関数におけるシャノンの公式を、非可換代数多様体に使うと、

$$\pi(\chi, x) = [i\pi(\chi, x), f(x)]$$

$$p = x, q = y \rightarrow x + y = e^{-x \log x} \cdot e^{-y \log y}$$

$$= e^{-(x \log x + y \log y)}$$

$$= \int e^{-x^2 - y^2} dx dy = \pi$$

という、ベータ関数のゼータ関数版が、ガンマ関数になり、ガウス関数と帰結して、サーストン・ペレルマン多様体である、ヒルベルト空間で、全ての数学モデルが成り立っている。

$$\frac{e^{x \log x + y \log y}}{e^{x \log(x+y) + y \log(x+y)}}$$

$$= z$$

サラスの公式である、上の数式展開は、素粒子方程式である、益川・小林理論の帰結でもある。